

SCの職務の実際と 学校との連携の在り方

-チーム学校の一員としてのSCの役割-



SCとは

スクールカウンセラー配置実施要項より

- 学校の教育支援体制を支援するための専門家
- 学校だけでは解決困難な事案への迅速な対応
- 児童生徒の臨床心理に関して

高度に専門的な知識・経験を有する



心理の専門職として常にSC自身も問われている



SCのあゆみ

-SCの配置から30年-

1995(H7) SC活用調査研究委託事業 全国154校
阪神淡路大震災 13名の追加配置

2001(H13) SC活用事業 事業本格化

2025年度(予定) 全国公立小中学校 27500校配置
-文科省資料から-
「たくさんの方々の尽力があり 今の制度がある」



今回 共有したいこと

-ささやかな‘流れ’を生み出し 応援者を増やす-

- 1 事例を通じて再確認したい SCの役割
- 2 チーム学校の一員として 学校と協働・連携すること
- 3 ‘心理の専門職’であるSCとして 大切にしたいこと



相談予定表(例)

番号	時間帯	学年	学級	名前	よみがな	担任	内容	事前情報
	8:00~8:45			相談担当教員			事前打合せ	
1	8:45~9:25			いじめ不登校対策委員会 →(コンサルテーション)			情報共有 アセスメント	
2	9:25~10:00	4	2	A.B(本人, 保護者)		〇〇	※架空事例1	保護者からの依頼 医療連携あり
3	10:20~11:00	6	特	C.D(本人・先生)		〇〇	友人関係 課題の整理	本人の希望 前半養護教諭同席
4	11:15~12:00	1	4	E.F(本人) ※授業観察含む		〇〇	登校渋り 本人の思い確認	保護者の希望で
5	12:45~14:00						記録 (F.B)	※SC便り作成等
6	14:00~14:40	1	4	F.F(両親)		〇〇	本人面接のF.B 今後の対応案	両親も面談希望 保健室を利用中
7	15:00~15:40	6	特	C.D(保護者)		〇〇	本人面接のF.B 今後の対応案	これまでの経緯 関係機関連携情報
8	15:40~16:10						記録	
9	16:10~16:45			相談担当教員			F.B 記録提出	

相談計画作成のポイント

-相談予定表の活用-

- ①先に「打合せ」「記録」「F.B」を必ず入れていただく
※「大切なことである」とSCの側からも伝えていく
- ②面接前後に時間の余裕をもてるように調整する
- ③相談予定表を職員間で共有するとF.Bしやすくなる
※相談依頼は書面, 電話, Web等学校の判断で対応

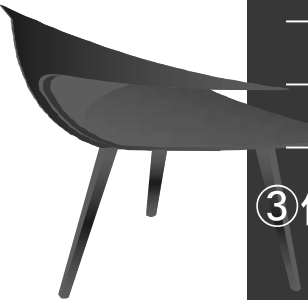
事前打合せ時のポイント

-打合せ時からアセスメントの準備-

- 
- ①相談経緯の確認 「誰からの相談依頼か」
 - ②困っているのは誰か (本人, 他児, 先生, 家族等)
 - ③いつ頃から(どの場面でどのように)困っているのか
 - ④家族構成と本人の強みを確認し面接に備える
※学校, 家庭等での情報も含めてアセスメントしていく
※継続的な面接にならない場合もあることにも留意

面接時のポイント

-学校(日常)の中での相談の意味-

- 
- ①本人希望の面接 ※‘心の境界’を大切にする
→本人の話したい事を尊重しながら対応する(強みも確認！)
※面接時に心理退行状態が生じすぎると日常(授業)に戻れなくなる場合もあるので心理的距離・対応に留意する
 - ②保護者や先生方に勧められての本人面接
→本人自身の自覚が少なく防衛が強い場合もある
→本人からあまり話がなければ健康チェック等活用(別紙)
→まず自己理解を深めるサポートから始める
 - ③保護者・先生の相談⇒一緒に対応を検討するのも効果的！

「大切にしてもらえる感覚」

場所 席の配置 明るさ 空調 仕切り等の工夫

時間 限られた時間に心は守られる

面接方法 言語 活動・遊び(言語面接困難時等)
健康チェック等の活用

※対応について学校と事前確認

面接形態 本人 保護者 同席 並行 継次

アセスメント

-見立ては多面的に学校との協働を前提に-

課題の整理 本人の課題 敏感さ 言語化の苦手さ 発達面等

環境要因 家庭 集団場面 対人関係等

二次的な課題 不登校 心身症状 問題行動等

課題の見立てと支援方針(キーパーソン)

関係機関連携の必要性 医療 福祉(SSW) 地域支援等

☆本人の強み 絵 工作 運動 音楽 PC 文章 ゲーム等

・SCの考え・価値観だけで見立てると連携・協働が難しくなることがある

・子どもの課題(症状)は家族等の課題に巻き込まれ出現する場合もある

・本人・保護者、先生方、支援職(関係機関)等の情報をもとに多面的に

・学校全体で子どもを応援していくための見立て(学校全体のケース)

実施記録簿

-勤務時間内で書き終える形に-

- ・主訴例 「教室にいるのが辛い」(本人の言葉)
 - ・本人の状態(睡眠 食欲 感情 学力 人間関係等)
 - ・環境的なテーマ 家庭状況 人間関係 空間 刺激
 - ・SCの見立て 緊急性の度合い 等
 - ・今後の支援の方向性の提案 面接の継続の希望
 - ・支援のキーパーソン 本人の興味・関心・強み 等
- ※先生方と本人・保護者の打合せの機会も提案！

F.B時のポイント

-先生方・保護者への労いと子どもの思い・強みを繋ぐ時間-

- ①相談担当の先生に確実にF.Bできる時間を確保
⇒記録簿に要点を付箋などで添えて強調する
- ②本人の課題, 環境的な背景, 課題の見立てと方針
- ③次回(まで)の対応の提案・コンサルテーション
面接継続の有無 本人→保護者 関係機関連携
※次回までの間隔空く場合の具体的対応案

コンサルテーションと職員研修

ケースの見方, 関わり方, 関係機関との連携の必要性
等学校から相談されたことに対して助言等を行う。職員
研修で事例検討会形式で理解を深めるのも効果的。

コンサルテーション・職員研修(例)

- ・Aさんの不登校をどう理解するか 今後の対応案
段階的な支援の在り方等
- ・問題行動や症状の理解の仕方及び対応
- ・発達, 学級状況の課題, 虐待, 災害対応まで

いじめ不登校対策委員会

- ・月1回程 管理職 学年 関係の先生方 専門職で
- ・学校全体の児童・生徒の情報共有 対応の検討
- ・生徒指導上の課題がある児童・生徒に関することも
→支援の必要性の検討⇒会議後に詳しい打合せ
⇒支援の方向性・役割分担
⇒コンサルテーションへ

関係性をサポートする

SCは相談システムの中での‘潤滑油’でありたい

子ども・保護者・学校間に不和がある場合

→長期間お互いに我慢が続いている状況の懸念

↓SCの面接・課題のアセスメント

子ども・保護者↔安心して先生方と話せるように

支援がスムーズにいくように

「誰にどのようなサポートが効果的か」

守秘義務

相談者の安心と安全面を最優先に

学校に情報を共有していただく

子ども・保護者と学校の架け橋となる情報共有

できるだけ相談者の同意を得ることを心がけ

学校側と情報の取り扱いについては十分確認する

カウンセラーの基本的な3条件

-カール・ロジャーズ提唱-

- 1 自己一致
- 2 共感的理解
- 3 無条件の肯定的な関心・受容

「治そうとするな わかろうとせよ」

自己一致

-カウンセラーとしての姿勢・態度-

「自分の内面で起きていることを
リアルタイムで正確に自覚できている状態」

- ・相談者の話を聴きながら生じる内面での反応
- ・その反応や感覚, 感情や思考等を正確に認識

例 (内面)苛立っている→(態度)なかったことにする
苛立ちに気づけない
↓自分の感情を認める
ニュートラルな状態に戻せるか

共感的理解

「相談者が伝えたいことをカウンセラーができる限り
共有・分かち合うこと」

相談者が伝えたい経験・感情・感覚・考えなど
「なるほど」「そういうことか」 静かで深い実感の部分



相談者が「分かってもらえた」と実感できるか



無条件の肯定的な関心・受容

-大切にしてみよう経験-

肯定的な関心

相談者と相談者の話を「限りなく肯定的に捉える」
強い興味・関心をもって話を聴く

受容の大切さ

※相談者「排除, 排斥, 疎外, 無関心」の過去の経験
相談者の話, 訴え, 在り方があるがままに受けとめる



助言の難しさ

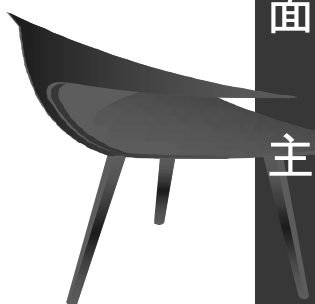
-自己決定を応援するために-

助言することの意味を問う

相手の主体性を奪う懸念(依存関係の助長の懸念も)

面接時は多くの助言よりも本人自身で気づけるように

主体的に支援を選べるような提案を心がけたい



相手を大切にする

-子ども・保護者・先生方・SC自身の心も大切にする-

相手の経験・感情・考え方を大切にする

大切にするための時間・空間・‘話の聴き手’がある

相手を大切にするためには

‘聴き手の自分’を大切にできているかも問われている



心を温めながら 応援者を増やす

「大切にされる」経験を通じて 心とからだが温まり

子どもたち 相談者が 自分の意思と タイミングで

選び 自己決定できるように 一緒に応援する

伴走者のように 子どもたちや学校の力を信じて



子どもの支援に携わる

子どもがサインを出すと
周りにお友達・家族・先生方・支援者
お話しする人が増えていく

子どものことを一緒に考えて
たくさん話して涙も流して
クラスのお友達も優しくなって 学校にも安心できる場所ができて
子どもが「大切にしてもらえる」時間が増える

子どものサインは安心のつながりが増える機会になるかもしれない
子どもの思いは大切な架け橋
「明日の朝を子どもたちが安心して迎えられるように」

